第３課　イエスと使徒たちの聖書感

【暗唱聖句】

**イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」マタイによる福音書4章4節**

【日曜日・聖書に書いてある】

イエス様はサタンから3つの誘惑を受けられました。一つ目はパンの誘惑、二つ目は神様を試みる誘惑、そして最後にこの世の富と栄華に対する誘惑です。これらすべての誘惑に対して、イエス様は聖書の言葉を用いて反論し勝利されました。つまり、聖書に何と書いてあるのかが行動の基準となるということを示されたのでした。このサタンの誘惑の物語から学べるのは、様々な誘惑に対してどうして良いのかわからないときは、聖書の中に答えがあるということです。そして、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」とイエス様が言われたように、聖書の御言葉はわたしたちが正しく、幸せに生きていくために必要であるということです。パンだけを求めて生きているならば、正しく生きる道を見失ってしまうことでしょう。だから、サタンは聖書を読ませないように誘惑してくるのです。世の終わりには「御言葉の飢饉が来る」と預言されています。

**「見よ、その日が来ればと主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく、水に渇くことでもなく、主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ」アモス書8章11節**

　ある教会員の方が、このコロナ問題で礼拝がクローズになってしまい、メッセージが聞けない、まさに御言葉の飢饉がやって来たと思いました」と言われました。礼拝ができないことによって、御言葉に飢え乾くという気持ちはよくわかります。これも終わりの時のしるしの一つかもしれません。ただ、御言葉に対する飢え乾きが生じることによって、逆にこれまで以上にご自分で聖書をむさぼり読むときとなればと願っています。

【月曜日・イエスと律法】

イエス様は**「はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」（マタイ5:18）**と言われました。神様が一度語られた言葉は真理であり、その言葉が訂正されたり、変更されたりすることはなく、永遠に変わらぬ力を持っています。しかし、イエス様が**「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」（マタイ22:29）**と言われたように、わたしたちは聖書の言葉が持っている意味も力も、正しく理解することができないことが少なくないのです。その中でも多くの一般のクリスチャンが誤解しているのが、律法は廃されてしまった、あるいは変更された（安息日が土曜から日曜へ）というものです。「律法の文字から一点一画も消え去ることはない」とイエス様が言われているのになぜでしょうか。またイエス様は、「律法全体と預言者（旧約聖書のこと）は、この二つの掟（神を愛し人を愛すること）に基づいている」と言われ、律法は聖書の根幹をなすものだと言われたのに、なぜ廃されたなどという発想が生まれるのでしょうか。確かに、パリサイ人や律法学者のように、律法を守らなければ救われないという考えは間違っていますが、だからといって律法が廃されたわけではないのです。

【火曜日・イエスと聖書全体】

イエス様が十字架で殺されてしまったことで意気消沈し、悲しみのうちにエマオへ向かう2人の弟子がいました。そこに復活されたイエス様が現れて、**「ああ物分かりが悪く、心が鈍く、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち（よ）、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか」**と言われます。すべてがこうなると、初めから聖書に預言されていたではないかと言われたわけです。そして、**「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明され」（ルカ24章27節）**たのでした。ここで注目すべきは、預言などの聖書の一部だけではなく、聖書全体にわたりとご自分について書かれていることを説明されたと書かれてあることです。イエス様が聖書とご自分をどのように結び付けていたのかがわかります。聖書はすべてイエス様のことを、あるいはイエス様に関連することが書かれてあるということです。ゆえに、わたしたちがイエス様を理解するということは聖書全体を理解するということであり、またイエス様をお伝えするということは、聖書全体の意味を解き明かしていくことでもあるのです。

【水曜日・イエスと聖書の起源と歴史】

聖書の起源は神様の中に見出されます。そこには人生のあらゆる局面における最高の権威が含まれています。神様は人類の歴史の中で働き、聖書を通して御旨を人類に示してこられました。マタイ19:5で創造主が**「それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる」**と言われたと、書かれてあります。しかし、この言葉が書かれてある創世記2:24では、神様が言われたとは書かれてありません。ただ、事実としてそうなると書かれてあるだけです。にもかかわらず、イエス様は創造主なる神様の言葉とみなしているわけです。つまり、これを書いたのはモーセですが、神様が書き手とみなしているということです。

　また、イエス様は聖書に書かれてある出来事や登場人物は、すべて歴史的事実とみなして用いられている場面が色々と出てきます。たとえば、ノアの洪水やダビデが空腹だったときに神の家に入り祭司のためのパンを食べた出来事、エリヤがカラスややもめによって支えられた物語など、文字通りの事実として取り上げています。特段、驚くべきことではないのですが、聖書は歴史的事実ではないと主張する人は世の中に大勢います。クリスチャンと自称する人の中にも、非科学的な出来事に現代的な解釈を加えようと試みる人たちが少なくありません。イエス様が素朴なまでに、当たり前のように旧約聖書の人物名を出来事を取り上げておられることは、聖書に解釈を加えようとする人たちに対する抑止につながるかもしれません。

【木曜日・使徒たちと聖書】

使徒たちもイエス様と同様に、聖書を扱っていることがわかります。すなわち、それは聖書の言葉は神様の言葉であると理解し、ゆえに教理・倫理・預言の成就に関して、聖書の権威や信憑性を疑ってはいる様子は全くありません。たとえば、**「ダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました」（使徒4:25）**と、聖書の中には詩篇など、たくさんのダビデの言葉が記載されているわけですが、それらのダビデが語った言葉を神様が語られた言葉として理解しています。

　また、ローマ9:17には、**「聖書はパロにこう言っている、「わたしがあなたを立てたのは、この事のためである。すなわち、あなたによってわたしの力をあらわし、また、わたしの名が全世界に言いひろめられるためである」**と書かれてあります。パロに語っているのは明らかに神様です。しかし、ここでは聖書と言っています。つまり、聖書の言葉と神様の言葉を同一視しているわけです。

新約聖書の中には数多くの旧約聖書からの引用がありますが、その際にはしばしば、「こう書いてある」という言葉が伴います。このことは新約のクリスチャンたちが旧約聖書の権威を認め、イエス様や弟子たちの教えの基礎であったことを裏付けています・